

曇鸞大師を知りたい！



(476-542?) 中国の雁門(現在の山西省代県)の生まれ。
法然が浄土宗相承の祖師と定めた「浄土五祖」の初祖。
また親鸞が定めた「七高僧」(七祖ともいう)の第三祖。
『往生論註(おうじょうろんちゅう)』を書いている。
これはインドの大乗仏教の著名な論師で、唯識思想の大成者でもある世親菩薩の『往生論』の解説書。日本の浄土教系の諸宗派に、とても大きな影響を与えた僧としても有名。
月曜画(「中華浄土宗協会」印)

「中国の浄土教僧・曇鸞大師について」

曇鸞大師と聞いて、この方をご存知でないかたも多いのではないかと思います。しかし親鸞聖人であれば、ほとんどの方がご存知ではないでしょうか？

曇鸞大師は5～6世紀の中国において活躍された著名な浄土教僧で、主な著作に『往生論註』(『浄土論註』ともいう)があります。この著作はインドの世親菩薩が書かれた『往生論』(『浄土論』ともいう)の注釈書なのですが、両者を並べると、

世親菩薩『往生論』

曇鸞大師『往生論註』

「親鸞」という名前が見えてくるのではないかと思います。名前の一部をいただくほど親鸞聖人はこの両著、特に『往生論註』に大きな影響を受けているのです。

そのような事情もあり、曇鸞大師に関する書籍は多く出版されているのですが、親鸞聖人への影響の大きさ故か、親鸞聖人のフィルターを介した曇鸞大師像を紹介する書籍も少なくありません。

そのようななかで曇鸞大師の実像にせまった書籍として『浄土仏教の思想四 曇鸞・道綽』(講談社、1995年)があります。この書籍のなかで藤堂恭俊氏が「曇鸞—浄土教を開花せしめた人と思想」と題して執筆されています。

曇鸞大師は、特に日本の浄土教諸宗派において祖師として崇められていますが、同時に、中国の北魏という時代に、并州(現在の山西省の一地方)において浄土教を信奉していた一僧侶でもあります。藤堂氏は祖師としての曇鸞像を一度差し置き、当時の仏教界の状況や金石文(石や金属等に彫られた文字資料)なども駆使しながら、なおかつ専門書としては平易に、曇鸞の人物像や思想の詳細について迫ったもので、おすすめできる書籍です。

また自著で恐縮ですが、石川琢道『曇鸞浄土教形成論—その思想的背景—』(法蔵館、2009年)(三蔵図書館請求記号:188.434-176)もおすすめさせていただきます。前出の藤堂氏が金石文等を使う手法は、前出本よりも更に古く、同氏『無量寿経論註の研究』(佛教文化研究所、1995年)から用いられているものです。しかし近年の中国における新しい金石文の発見数は著しく、藤堂氏の二つの著作に取集し、曇鸞大師当時の浄土教信仰の状況をより詳細に明らかにしたものです。また藤堂氏と同じく、祖師像を離れ、中国浄土教史上における一僧侶としての曇鸞像を明らかにしたという点も、あまり他著には見られないもので、おすすめさせていただきます。

第7回 研究員のオススメ本紹介コーナー

〈中国の浄土教僧・曇鸞大師について〉

今回ご紹介いただいた三蔵文化研究所研究員は…！



石川 琢道 (いしかわ たくどう)

専門分野: 中国浄土教思想史

2022年度第2回公開講座では、「曇鸞大師について」と題して発表いただく予定となっています。発表に先駆けて、オススメ本をご紹介いただきました。

中国の曇鸞大師は、日本の浄土系の宗派に大きな影響を与えていたとされる人物です。浄土真宗の親鸞聖人の「鸞」の字もこの曇鸞大師の名前にもなみ付けられました。

先日は図書館の間覧室を利用して、お元気そうなお姿を拝見しました。

曇鸞浄土教
形成論
その思想的
背景

石川琢道

石川研究員による選書コーナー

「中国の浄土教僧・曇鸞大師について」

曇鸞大師と聞いて、この方をご存知でないかたも多いのではないかと思います。しかし親鸞聖人であれば、ほとんどの方がご存知ではないでしょうか？

曇鸞大師は5～6世紀の中国において活躍された著名な浄土教僧で、主な著作に『往生論註』（『浄土論註』ともいう）があります。この著作はインドの世親菩薩が書かれた『往生論』（『浄土論』ともいう）の注釈書なのですが、両者を並べると、

世親菩薩『往生論』

曇鸞大師『往生論註』

「親鸞」という名前が見えてくるのではないかと思います。名前の一部をいただくと、親鸞聖人はこの両著、特に『往生論註』に大きな影響を受けているのです。

そのような事情もあり、曇鸞大師に関する書籍は多く出版されているのですが、親鸞聖人への影響の大きさ故か、親鸞聖人のフィルターを介した曇鸞大師像を紹介する書籍も少なくありません。

そのようななかで曇鸞大師の実像にせまった書籍として『浄土仏教の思想四曇鸞・道綽』（講談社、1995年）があります。この書籍のなかで藤堂恭俊氏が「曇鸞—浄土教を開花せしめた人—と思想」と題して執筆されています。

曇鸞大師は、特に日本の浄土教諸宗派において祖師として崇められています。同時に、中国の北魏という時代に、并州（現在の山西省の一地方）において浄土教を信奉していた一僧侶でもあります。藤堂氏は祖師としての曇鸞像を一度差しおき、当時の仏教界の状況や金石文（石や金属等に彫られた文字資料）なども駆使しながら、なおかつ専門書としては平易に、曇鸞の人物像や思想の詳細について迫ったもので、おすすめできる書籍です。

また自著で恐縮ですが、石川琢道『曇鸞浄土教形成論—その思想的背景—』（法蔵館、2009年）（三康図書館請求記号：188.434-I76）もおすすめさせていただきます。前出の藤堂氏が金石文等を使う手法は、前出本よりも更に古く、同氏『無量寿経論註の研究』（佛教文化研究所、1958年）から用いられているものです。しかし近年の中国における新しい金石文の発見数は著しく、藤堂氏の二つの著作に紹介されていない有益な史料が多数発見されています。拙著は、そのような史料を可能な限り収集し、曇鸞大師当時の浄土教信仰の状況をより詳細に明らかにしたものです。また藤堂氏と同じく、祖師像を離れ、中国浄土教史上における一僧侶としての曇鸞像を明らかにしたという点も、あまり他著には見られないものですので、おすすめさせていただきます。（石川琢道）